

修士論文（要旨）

2025 年 7 月

日本語教育実習における媒介語使用の考察と課題
—非母語話者実習生および非母語話者教師の視点から—

指導 齋藤 伸子 教授

国際学術研究科

国際学術専攻

グローバルコミュニケーション実践研究学位プログラム

223J1901

羅 敏月

Master's Thesis(Abstract)

July 2025

Issues in Using a Mediating Language in Japanese Teaching Practicums:
Perspectives of Non-Native Teacher Trainees and Teachers

Luo Minyue

223J1901

Master of Arts Program in Global Communication

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

1. はじめに	1
2. 研究の目的	1
3. 用語の定義	2
4. 研究の背景	2
4.1 日本語教師養成の枠組み	2
4.2 日本語非母語話者の教師の現状	4
4.3 日本語教育実習の現状	4
4.4 日本語非母語話者の実習生の現状	4
4.5 教授法としての「直接法」と「母語の使用」	5
5. 先行研究	6
5.1 日本語非母語話者の教師に関する研究	6
5.2 日本語教育実習に関する研究	7
5.3 日本語非母語話者実習生に関する研究	7
5.4 日本語教授法に関する研究	8
5.5 日本語教育・実習における教授法に関する研究	9
6. アンケート調査	10
6.1 研究対象者と調査方法	10
6.2 調査結果	10
6.2.1 実習生の属性および実習環境の多様性	10
6.2.2 担当クラスおよび学習者の構成	11
6.2.3 媒介語使用の実態と判断理由	13
6.2.4 媒介語の使用場面と未使用者の使用希望	15
6.2.5 共通母語による誤用理解と指導への活用	15
6.2.6 媒介語使用に対する実習生の認識	16
7. アンケート調査考察	18
7.1 実習環境の多様性と媒介語使用の前提	18
7.2 担当クラスおよび学習者構成の多様性	18
7.3 媒介語の使用有無と選択理由の考察	18
7.4 媒介語使用場面の実態と希望の比較分析	20
7.5 誤用理解と誤用対応	21
7.6 媒介語使用に対する実習生の意識	22
8. インタビュー調査	22
8.1 調査対象者のプロフィール	23
8.2 調査概要	23
8.3 分析方法と採用理由	24
8.4 分析の手順	24
8.5 分析過程の詳細	25
8.5.1 文字化データの処理と概念の生成	25
8.5.2 概念名と定義の設定	26

8.5.3. カテゴリーの構築	26
8.5.4. 結果図の作成	28
8.5.5. ストーリーライン	29
8.6 信頼性・妥当性の確保について	29
9. インタビュー調査考察	30
9.1 制度的理念と実習現場とのギャップ	30
9.2 授業における媒介語使用の実態とその判断基準	31
9.3 非母語話者実習生の不安・自信・誤用理解	32
9.4 実習経験がキャリア選択に与える影響	33
10. まとめと今後の課題	34
参考文献	I
付録	①

要旨

近年、少子高齢化に伴い、日本に在留する外国人の数が増加し続けている。これに伴い、多様な学習ニーズに対応するためには、日本語母語話者教師のみならず、非母語話者教師の利点を活かすことが求められている。特に、媒介語を通じた支援が可能であり、学習者と母語や文化的背景を共有し、日本語の学習経験を持つことから、母語話者教師とは異なる視点を持っている点が注目されている。

しかしながら、日本語教育実習では依然として「直接法」（日本語のみで教える教授法）が主流であり、非母語話者教師や実習生が持つ「媒介語の教育的活用」といった強みが十分に活かされていない現状がある。また、学習者のニーズが多様化する中で、直接法だけでは対応が困難な場面も多く、柔軟な教授法の運用が求められている。

本研究では、直接法と媒介語の併用に着目し、特に日本国内で教育実習を経験した日本語非母語話者の実習生を対象に、アンケート調査とインタビュー調査を実施した。実習中の媒介語使用の実態と判断基準、教授法との関連、自信や不安など感情面への影響について明らかにし、非母語話者教師の強みを活かした多様性のある教育実習の在り方を考察・提言することを目的とする。

調査方法

本研究では、日本語非母語話者の実習生による媒介語使用の実態とその課題を明らかにするため、アンケート調査とインタビュー調査を組み合わせ実施した。

まず、アンケート調査は、日本国内の日本語教師養成課程において教育実習を経験した非母語話者実習生 50 名を対象に行った。調査内容は、実習の実施機関や実習地、学習者の日本語レベルや母語構成、媒介語の使用頻度と使用場面、媒介語使用の判断理由、誤用理解の経験および対応方法、媒介語使用に対する意識など多岐にわたる。調査はオンライン形式で実施し、協力者には事前に研究の目的を説明し、同意を得た上で回答を依頼した。

さらに、アンケート調査協力者の中から 2 名を対象に、半構造化インタビューを実施した。対象者は、それぞれ「日本で日本語を使って授業を行っている非母語教師」と「母国で媒介語を使用して授業を行っている非母語教師」であり、教育実習および現在の教育経験に基づいた媒介語使用の実態や判断基準、自信や不安に関する語りを収集した。分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いた。

分析結果

アンケート調査では、実習中の媒介語使用の有無は、実習先の方針、学習者の日本語レベルや母語の構成、授業の進行状況など、さまざまな要因によって判断されていた。媒介語が使用された場面としては、語彙や文法の補足、誤用の説明、教室内での指示や管理などの実践的な場面が多く、共通母語によって誤用の背景を理解できたという記述も多数見られた。また、媒介語の使用を肯定的に捉え、使用可能な環境であれば活用したいという意向を示す回答も多く得られた。

インタビュー調査では、実習生が文法や語彙の補足、誤用の説明、学習者からの質問への対応などにおいて媒介語を使用していたことがわかった。使用判断は学習者の理解度や授業の状況に応じて行われており、共通母語を通じて誤用の背景を把握できた経験は、指導への自信につながっていた。一方で、日本語のみでの授業が求められる環境におい

て、言語表現の困難さや母語話者との比較による不安を抱く場面もあった。これらの経験は、実習生のアイデンティティや将来の進路選択にも影響を与えていた。

結論

本研究では、日本語非母語話者の実習生を対象に、教育実習における媒介語使用の実態とその判断、使用経験が実習生に与える影響を明らかにした。媒介語は、学習者の理解支援や誤用の説明、教室運営などで有効に機能していたが、使用の自由度は実習先の環境や方針に強く左右されていた。

また、媒介語を通じて学習者の誤りを適切に理解・説明できた経験は、実習生の指導への自信につながる一方、全て日本語での授業に対する不安や心理的負担も見られた。こうした経験は、実習生の職業的アイデンティティやキャリア意識の形成にも影響を及ぼしていた。

以上の結果から、今後の日本語教育実習においては、学習者や実習生の多様性に対応した柔軟な教授法の構築が求められる。非母語話者教師の育成においても、現場の実情や学習者の理解を重視し、媒介語と直接法を効果的に組み合わせた実践モデルの開発が今後の課題である。

参考文献

- 阿部洋子・横山紀子(1991)「海外日本語教師長期研修の課題ー外国人日本語教師の利点を生かした教授法を求めて」『日本語国際センター紀要』1. pp.53-74
- 石井恵理子(1996)「非母語話者教師の役割」『日本語学』2月号. Vol. 15. pp.87-94
- 大平未央子(2009)「ネイティブスピーカー再考」野呂香代子・山下仁(編)『「正しさ」への問いー批判的社会言語学の試み』三元社. pp. 85-110
- 加納千恵子(2010)「大学院における日本語教師養成の課題ーネイティブ・ノンネイティブによる教師役割観の違いー」『国際日本研究』2. pp.99-116
- 川上尚恵、朴秀娟(2024)「教授環境の違いをふまえた非母語話者日本語教師の利点：国内の日本語教師養成プログラムへの提案に向けて」『神戸大学留学生教育研究』8. pp.25-42
- 顔幸月(2001)「台湾人日本語教師の母語使用に関する基礎的研究ー会話授業の分析を通してー」『世界の日本語教育』第11号. pp.17-37
- 木下康仁(2007)『ライブ講義 M-GTA ー実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- 高橋雅子(2015)「国内の日本語教育における非母語者教師に関する考察ー多文化共生社会における語学教師の多様性を問うー」『日本語教育実践研究』第2号. pp.104-113
- 坂田篤義(2015)「大出正篤の日本語教材と速成式教授法」『リテラシーズ』16. pp. 12-24
- 辛銀眞(2006)「日本国内の非母語話者日本語教師に対する学習者のビリーフの変容ー早稲田の初級実践を通してー」『講座日本語教育』42. pp.60-81
- 辛銀眞(2007)「日本語のフォリナー・トークに関するー考察ー非母語話者日本語教師の意識調査を通してー」『早稲田大学日本語教育学』1. pp.25-37
- 辛銀眞(2008)「日本国内接触場面のフォリナー・トーク使用に関するー考察ー非母語話者日本語教師の会話調査を通してー」『早稲田大学日本語教育学』3. pp.25-38
- 関正昭(1997)『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク
- 孫雪嬌(2017)「『母語話者信仰』はどのように現れているのかー日本国内の非母語話者実習生・教師に関する論考のレビューを通してー」『CAJLE2017年大会 Proceedings』. pp. 247-256
- 高見澤孟(2019)『新・はじめての日本語教育 基本用語事典(増補改訂版)』アスク出版. p.11
- 田中里奈(2013)「日本語教育における『ネイティブ』/『ノンネイティブ』概念：言語学研究および言語教育における関連文献のレビューから」『言語文化教育研究』11. pp.95-111
- 中川康弘(2020)「日本語非母語話者教師をめぐる議論の再検討の試み」『人文研紀要』96. pp.91-107
- 野々口ちとせ(2007)「非母語話者実習生の自己受容ー内政モデルに基づく共生日本語共生日本語実習の場合ー」岡崎眸(監修)『共生日本語教育学』雄松堂. pp.115-126
- 日本語教育学会 編・水谷修 編集委員(2005)新版『日本語教育事典』大修館書店. p.728

- 福田須美子（1989）「芦田恵之助の南洋群島国語読本（＜小特集＞「大東亜教育」と教科書）」『成城文藝』126号．pp.213-226
- 古市由美子（2005）「多言語多文化共生日本語教育実習を通してみた非母語話者教師の役割」『小出記念日本語教育研究会論文集』13．pp.23-38
- 堀恵子(2007)「日本語母語話者と非母語話者とが共存する教育実習のあり方を探る－麗澤大学大学院における教育実習受講者に対する調査から－」藤原雅憲・堀恵子・西村よしみ・才田いずみ・内山潤（編）『大学における日本語教育の構築と展開』ひつじ書房.pp.199-219
- 大和祐子（2014）「日本語非母語話者を対象とした日本語教育実習：アンケート結果からの考察」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』13．pp.35-50
- 大和祐子（2016）「日本語非母語話者の日本語教育実習生は授業観察を通してどのように成長するか？」『ヨーロッパ日本語教育 2015 ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』20．pp.177-182.
- 山田勇人（2023）「多様化する日本語教育における日本語教育実習のあり方－韓国での日本語教育実習を例に－」『山陽論叢』第30巻．pp.65-73
- 横田隆志（2013）「留学生の日本におけるノンネイティブ日本語教師に対する意識調査」『CAJLE2013 年次大会 Proceedings』．pp.322-331

- Celik, M. (2003). Teaching vocabulary through code-mixing. *ELT Journal*, 57(4), 361-369.
- Cook, V. (1991). The poverty-of-the-stimulus argument and multi-competence. *Second Language Research*, 7(2), 103-117.
- Cummins, J. (1981). The role of primary language development in promoting educational success for language minority students. In California State Department of Education (Ed.), *Schooling and Language Minority Students: A Theoretical Framework* (pp. 3-49). Sacramento, CA.
- Kern, R. G. (1994). The role of mental translation in second language reading. *Studies in Second Language Acquisition*, 16(4), 441-461.
- Laufer, B., & Girsai, N. (2008). Form-focused instruction in second language vocabulary learning: A case for contrastive analysis and translation. *Applied Linguistics*, 29(4), 694-716.
- Swain, M., & Lapkin, S. (2005). The evolving sociopolitical context of immersion education in Canada: Some implications for program development. *International Journal of Applied Linguistics*, 15(2), 169-186.

参考サイト

- 国際交流基金（2021）報告書『海外日本語教育機関調査』（情報取得日：2024年12月30日）
URL:<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey21.html>
- 法務省（2024）『外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策（令和6年度改訂）』（情報取得日：2025年1月2日）
URL:https://www.moj.go.jp/isa/support/coexistence/nyuukokukanri01_00140.html

法務省（2024）『令和 5 年末現在における在留外国人数について』（情報取得日：2024 年 12 月 30 日）

URL:https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00040.html

文化庁（2018）『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）』（情報取得日：2023 年 11 月 20 日）

URL:https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1401908.html

文化庁『日本語教員養成の現状について』（平成 15-17 年、2003-2005 年）（情報取得日：2025 年 1 月 2 日）

URL:https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9218806/www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaicho_usa/index.html

文化庁『日本語教育実習の仕組み（案）』（情報取得日：2025 年 1 月 7 日）

URL:https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/nihongo_kyoin/pdf/93186901_04.pdf

文部科学省（2024）『日本語教育実態調査－令和 5 年度結果の概要』（情報取得日：2025 年 1 月 2 日）

URL:https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/nihongokyoiku_jittai/kekka/mext_00002.htm